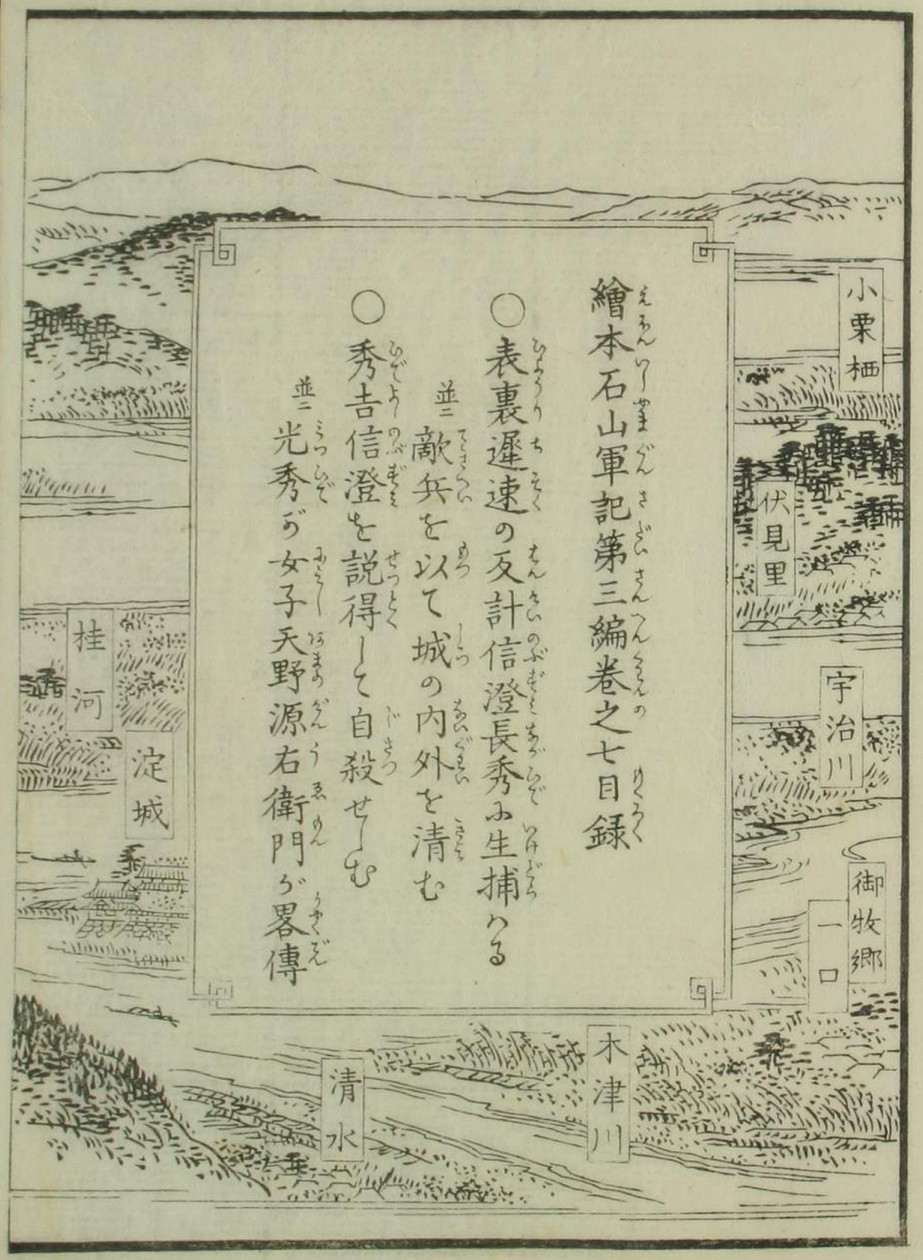
土屋正義編輯

繪本石山軍記 第三編 七

特14遠へ
2269
27

へ遠14
2269
27



繪本石山軍記第三編卷之七目録

○表裏遲速の反計信澄長秀ふ生捕らる
並ニ敵兵を以て城の内外を清む
○秀吉信澄を説得して自殺せしむ
並ニ光秀ゞ女子天野源右衛門ゞ畧傳

○羽柴明智城刕山崎大戦爭
幷明智方の諸勇士陣没

○光秀小栗栖ふく命を隕を
幷明智方の勇士諸處ふて切腹

繪本石山軍記第三編卷之七

土屋正義編輯

○表裏遲速の反計信澄長秀に生捕る幷び敵兵を以て城の内外を清む

偖も丹羽五郎左衛門尉長秀は織田信澄よりの返辞を聽仕て遣うり
ミ心に歓び竊う秀吉の方へ介由告知せ件の井上大九郎古橋佐助落合勘藏桂市兵衛四個
乃勇兵引卒尼ゞ崎の城内へ来りしかば信澄も丹羽小仕覚有とは知
ず最叮嚀に饗應して奥に迎へ座定りて信澄の稟〻ゝかハ其いやし
く〻織田の一族とて而も都近き當城小在おゞ〻光秀を誅伐おす縡
能さゞ〻日夜憂ひ苦しむ所貴殿其の微力を助ゝて亡君の吊ひ合戰
せんと有條信澄の本懐是に過ず御計畧の程も承り度先誓約の盞

ふゝ稟さんと近習に命じて酌を拿せ油断させんと酒宴を始む長秀乃傍らに四個の勇兵近習と成て引添居れども猛者と云へども信澄之を察わて心に慢り主従諸俱虜呉んと自ら盞を上て近習に酌させ卒々丹羽氏誓の祝盞慮外ふゝと差出す掌下を傍に在る桂市兵衛衝と蒐寄て腕を捕へ磯と押伏せ腕を捻曲用意の早縄懐中より拿出し手利く脊掌に縛り着る是ぞ驚く近習の者們古槁井上落合續ひて蒐寄り一々蹴倒して踏倒して言をも云せず縛にけり座中残りの近習の士狼狽廻つゝ立騒ぐを長秀大音に罵りて曰く汝們悪く腕立ふさげ主人信澄をば害すべきぞ藩中の者們爰へ来りて主を思ふ人ぐ僉降参せよゝ勢ひ猛く呼ばりゝきバ竊び躁れ〳〵力士ゝ輩

思ひの外ふる四個の近習ぐ力量本事凡尋あゝぬハ先を取れゝその働きに主人を救ん勇氣も折け唯尻込して悶き果如何ハせんと悶撫ふしけり長秀重ねて衆士に曰く一統立噪ぐず能承ハき信澄妻女の内縁に引き怨を義に換へ明智に順ひ既り織田方手断の由ハ俺間者を以て聢与聞とる不忠しゃ謂ん不義しゃ謂ん前年父信行の謀叛にも懲ず此長秀をも害ハんが為に斯呼寄ゝりを疾とり察ハ則ち不計畧の裏を掻者ぞり信長公の大恩を打忘れ當敵光秀に媚諂ひ織田有功乃諸臣ぞ敵對逆意に與する信澄主従長秀天ぞ代つゝ誅戮せんぞれども汝們仝非を誤つゝ降参せば勘辨加へて助命せゝめん最も幼君三法師麿御繈當城中へ御成あゝせらる汝們城内滞りふく掃清

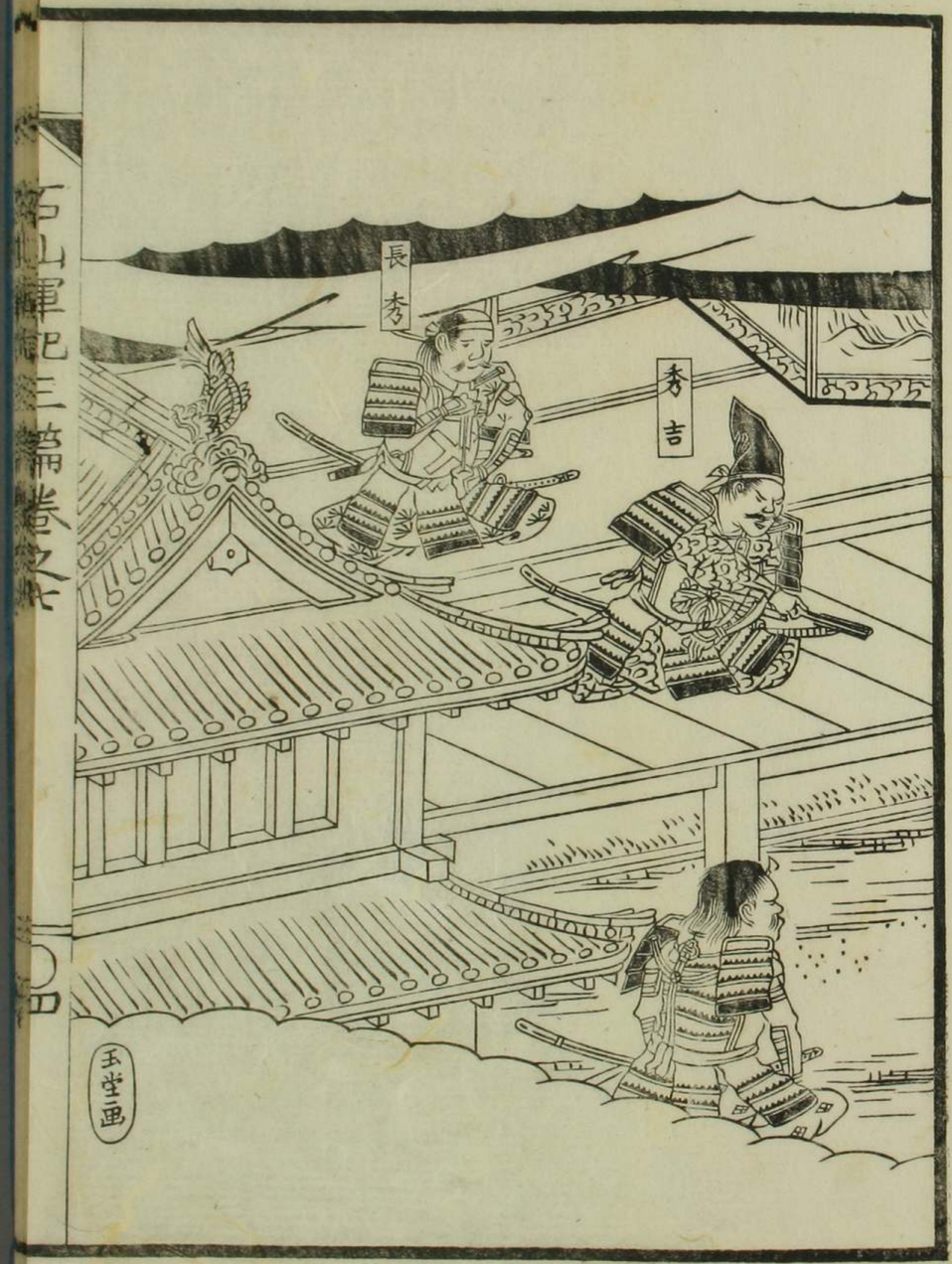
め大将軍を迎へ奉るべし幼君當城へ入御ふ〜せ給たゞ宜〜命乞を願ひ
呉んと云城中の兵士畏き承はり主人信澄の非義を覩悟し士卒們銘々
部索をふ〜て城中を掃除し水を打塵芥を焼砂を盛叮嚀に清めける
所へ丹羽が郎等江口三郎左衛門坂井與左衛門等三千余人の手勢を引
て城外に進み来りけるに長秀城中の者們へ命じて汝們城下乃道筋
通路の往来悉く城内同様掃除すべし此方の手勢ハ不知案内なり故ろ
以て之を命じがたし早々俺勢と入替りて御成の御用勉むべしと云否と
拒まば主従が身の上と一同承諾して人数残らず城を出て道々掃除す
きバ江口坂井等手勢を引卒し戰ひもふく城中に入替る剰へ信澄乃家
臣們を以て城の内外を掃除おさしめ味方の兵卒倉労せず安々入城して

休息させしは是秀吉が方寸の智畧にして又に血を塗ずして城乗
取神策奇謀り丹羽長秀も愈秀吉の器量に伏従ふ〜けり

○秀吉信澄を説得して自殺せしむ并び光秀の女子天野源左衛門が略傳

然程に丹羽五郎左衛門尉長秀ハ羽柴秀吉が妙策に随ひ首尾ゝく織
田信澄を生捕へ渠が謀計の先を越て何の苦もふく縛縄せ〜かバ長秀
主従の歓び大方ふらず手勢三千を以て城中を堅め掃除を下令歓兵
追出し武具刀剣弓鳥銃の類一品も敵の手に返し遣ず悉く丹羽乃
手へ分捕とす偖此趣き早騎を以て秀吉の陣へと達しゝかバ秀吉即
時に幼君を供奉し池田紀伊守信輝長岡兵部大輔藤孝父子を始め
摂河諸城の軍勢を引連兵庫を立て尼が寄に到らば丹羽五郎左衛

秀吉長秀
謀を定めて
織田信澄を
生捕る図
信澄


長秀
秀吉
玉堂画

門ハ城門を開かせ途中に出て迎へ奉る秀吉城中に入る本丸に通り上段の左に座を構へて三法師麿を德善院小抱かせ上段中央に居進らせ長秀ハ君の右方に座しなりける其他長岡池田以下の諸將各々列座定まりなまバ軈て七兵衛信澄を曳出さしむ遥末座にぞ扯居なまバ信澄此為体り大きに怒り居丈高ふ成て罵りけるハ長秀如何ぶれば俺を欺狂斯縛めて辱しむやらん俺ハ是信長の正く甥なり汝們ゞ為ぶも主君同前今所謂ゆく理不盡の狼藉武士の規則も得知ざるにや賊徒り等しき亂行暴激信長討き給ひしを幸とし己々ゞ欲心増長ふして諸國を押領せんと欲ふり俺們ゞ在を妨げふりして奸計を以て害ふ心よの天罰奚ぞ遁るべきと嗔きなまば秀吉怒つて八打白眼付此期に進んぞ志しも改めず妄言を以て偽り飾り猶介躬の非を掩んと為る哉汝天罰と云縡を辨へぶて信長公の大恩を打忘れ剰へ御家門の義に相背き逆臣光秀に合体ふして織田家り仇を做んとする條十罪よや謂ん比方ふし天罰立地小報い来つて斯生捕し八己と招く自業自得の身を責るふり俺們表向り攻寄計取後代の者せしめにせんハ最も易き縡よハ雖も主家の一族なる苗字を重んぞ且八亡君の御恥辱を憚り諸人の見聞小係らぎる様密に謀つて搦め捕しハ汝を思ふ俺們ゞ情ふり然るに却て俺們を罵り逆賊荷謄ひ露顕も悟ず織田信長の甥なりふぞ能も頬厚く稟せし者こそ汝真の武士道を思ぞ躬の辱を曉て屠腹を遂よ然らバ亡君ひ

御悪みの程も薄うるべしと恥しめくるまバ信澄猶も我強く陳じて世俗の浮説を擄ゝて猥に俺を殺害せんとゝ汝們こそ織田家押倒す逆臣同様ふりと云放せば秀吉信澄の傍小立寄て詞静り小諭して曰く尓方斯擒し成し上ハ今更如何様に偽り飾るゝも恕し放つべき罪科小非ず汝光秀の方に與せずんば長秀を捕んと力者を忍ばせ室の次に置せしハ何の為ぞ加夫汝實に亡君を悼まず汝の妻女ハ逆臣の女子ふり光秀と縁者の因断べき所潔白ふりねど離別もせぞ却て女房の内縁小曳さを主君を弑せし逆罪人に属し忠に背き孝義に外る聖教を諳じ五常の道も辨へゝんに俺汝を搦めしと恨むべしゝ亡君の御怒り天に通じ神明の罰する所ふれぞ迫めてゝ最期に心を革め罪を悔んぞ生害せしよ死を清くすぶハ武士の嗜み世の嘲りも自然と消べく御一門の恥辱も雪ぐ道理ふり迎も助らぬ玉緒ふるに詠伏死して黄泉に到り何の面目有て君に見参や願もくバ未期に臨み悪心を翻し幼君怨敵退治の首途に唯潔よく屠腹あしバ亡君への分解冥途に於く謝罪を顕ハす種ゝも成べしまゝ足下の妻女に於くハ假令逆臣の女子なりとも女の綷ふ小ぞ一命を助る承引ふんバ是非小逃ぞず君家に敵對罪を以く此場を去せず殺伐すぞし疾々生害有く然るべしんと云つ自ら信澄の縛めを解刀を與へく屠腹を勧む信澄も秀吉の理詰に押も悪に傾く心を恥入返答もふく差低伏しぞ迎も道ぶぎば敵

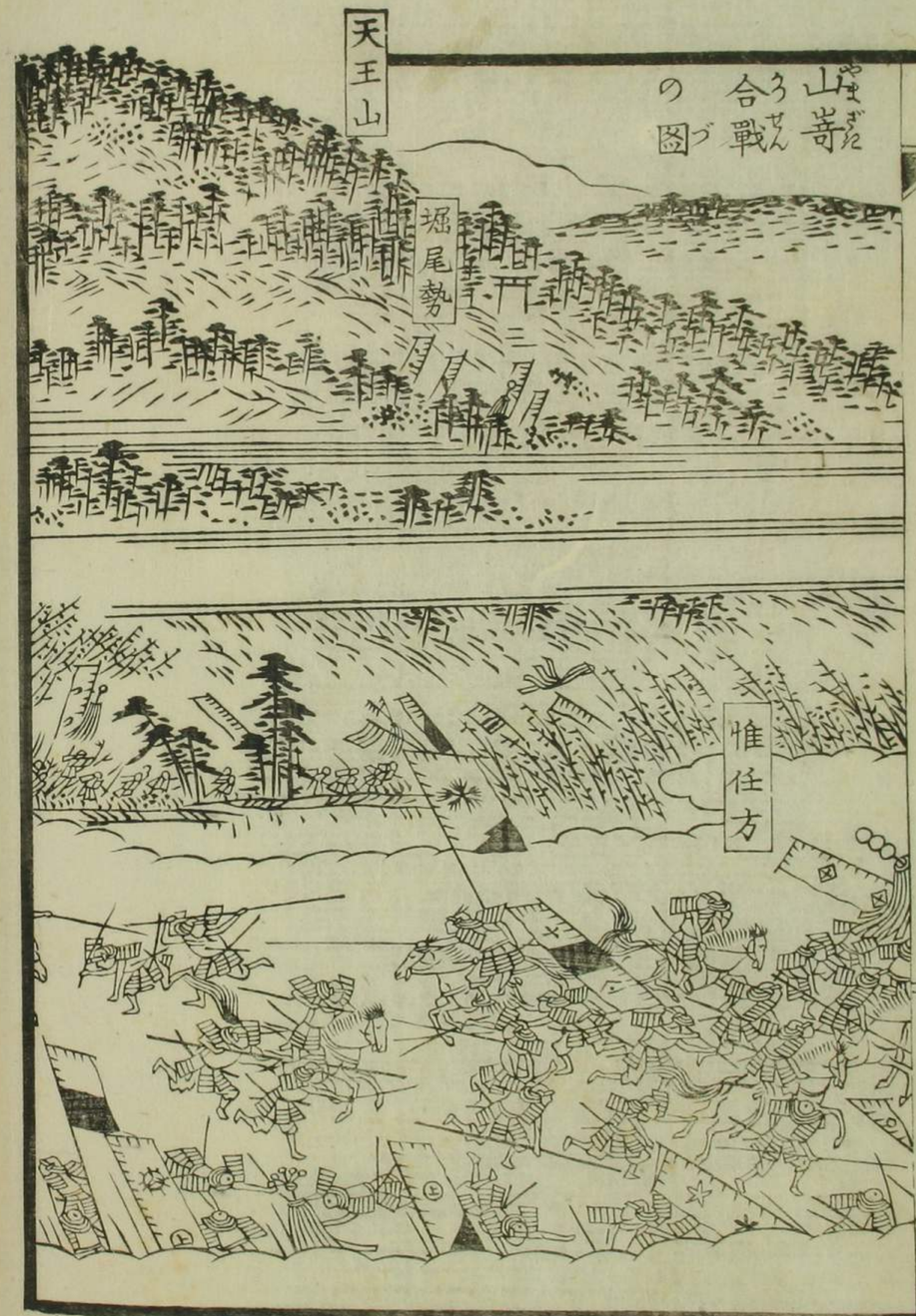
中の擒観念するゝ外術ふくまゞ言をも云ず刀を扯拔て両肌押脱
刀を逆手に左の膳下へ刺立つ今や善道に基く因ゝ一言放つて
刀を引廻し低伏に成る息絶にゝ行年廿四歳と云秀吉神妙ゝと讃嘆し
大丈夫の一言変ずべゝ信澄の妻女ハ人を属て京都明智が方へ
送り帰しぬ此女子當時妊娠さるより信澄心に不便小思ひしを秀
吉早くも之を暁察して妻女の命ハ助けんと云に信澄心殘さず自害
ふせり妻女も亦迫て谷娩と成良人の後を逐着ぞやゝ惜るゝ命を
存命けるゞ秀吉の情に父の許へ帰さる光秀も信澄の自殺を聽く憑
みに思ひし婿を失ひ是非ふく女子を坂下城へおくり老臣に命じて
勦りけるゞ該女子親夫の縁の薄うりん父光秀も小栗栖に滅亡し加

之坂本落城の砌介母並に同胞の男女悉く數を盡して自害せしが
原来妊娠ふる婦人ふゝ光秀の妻室照子明智が家臣妻木主計頭範賢の姉ゝ
を憐み五逆の大罪ハ三族を誅ゝと聽じ俺們茲に自害すゝ事足べ
し敵將秀吉の赦せし女子存命して谷娩ゝふり父母一門の戰死乃故
跡命日回向の訪吊ひハ介方一個の躬に預る所千僧万僧の供養に勝
らん逸まつく生害すべゝ涙ぶゝに呉々と云諭し家臣天野源
右衛門國次り附屬し坂本城中を落し出しゝり源右衛門女主の遺
言を守り此女子を連同國朽木に趣き主従戸山里に閑居して最老
實に介抱ふせしゝ程ふく此女子女の兒を平産ス源右衛門此嬰子を
吾子とす然れども介母の身上に於ては亡君光秀の息女と云織田信

澄の後室と重んじ信義貞操を守りて淫せざ天正十二年甲申秋の頃
源右衛門朽木の下居を相怙み京都に出て東寺辺に假居し暫く町
家住居に浪士せしが先達て秀吉の指圖として光秀の家臣の輩に
於てハ罪ハ主に有て家臣を咎めず向後仕官勝手たるべしと寛仁
大度の觸有しかバ天野も此觸を聽て偖て京都へと移轉
せしかり素より武勇の名を取天野測ず羽柴美濃守秀長源右衛門
が在京下居を聽き紹介有て仕官を勧め遂に羽柴秀長の臣下となりぬ
然るに天正十八年庚寅関白秀吉公小田原征伐の時御舎弟秀長卿を
以て大阪城御留主仰せ附らるゝ所秀長卿火急に病脳さ起僅乃
御煩ひにて御逝去あり依之天野源右衛門國次ハ再び憑こに思ふ

主を失ひ秀長卿に御世嗣有まきねば是非なく主家を退身して又
後に二代関白秀次公に勤仕す知行五千石賜ふ然るに彼信澄の後室の婦
人此時未だ再縁せず女の子乃成長而已樂しけるが天性美艶の
容貌ふりを誰云しなく評判高く源右衛門ハ仔細を秘して己が妹と
と云くろやしかバ好色の秀次公之を聽傳へ無体に懇望禀さんつ侍女
に上よと命ぜられ〻ふ源右衛門大きに迷惑して段々辞退に逮びし
共秀次公一向に聽入給ハず予が奉仕を固辞する處ハ主を不足に思ひ
成べし然ばかバ妹と世間を繕ひ汝が夜床の花と做らん如何々々と詰
られ〻きハ源右衛門弥困迷して稟しける八今ハ那をぅ隠し候べき
妹と呼しハ拙者が虚謀實ハ故主明智日向守光秀の息女織田七兵衛

尉信澄の渾家大閤様乃御仁計を蒙り尾ヶ嵜落城の節助命を受父光秀の許へ歸さゞて坂本の城に引把し所間ふく光秀一族滅亡の時女主の遺託ふ婦人を伴侶江刄朽木山中に幽栖し信澄の遺紀念の一女其節出生致され候ふて既ふ當年十歳と成ゝ其の子ゝし養育仕つる古主光秀の悪名を憚り假に妹と呼候へども其ゞ為にゝ主人の息女一且恩禄喰ゝる廉以主人に今更奉仕の儀を稟し勧むも慢るに當る今まで育み候ふ忠義も消べく殊ふ両親喪ふ女子ふれば御懇命の程ハ有難々きとも原主從の間殊ふ孤獨ふり菩提の道にも入べき心底且ハ光秀の女子恐尺仕らバ御前の御躬に誹謗有てふ御父君大閤様へ稟し譯ふ御賢慮仰ぎ奉るとて忠言含ゝて辞退すゝ共秀次公曽て會得し給ハず汝遽て所望に應じずんば禄取上ゝ暇を出さんや主の望ゝを拒むハ不忠ふり汝明智ヶ女子養育ふすも今談秀次の影ふゝずや古主を思ゝ當主乃恩命違背すべきの道に非ずハ父大閤への聽へを稟すハ汝ヶ後日の迯口演ふり夫ハ秀次ヶ胸ゝ有綜ヶ汝乃遠慮に逮ぶゝずゝ押て懇命下りゝきバ天野源右衛門も詮方ふく短氣肝症の若主ふりぞ終に懇命御請稟し上退殿して邸へ歸り彼女子へ委細を話して所望に悖らバ知行ふ放さゝ再三浮浪の躬とふるゝきは國次母子を育むに種ふし伝関白の傍ゝ給仕ふゝバ雲上人に交加青雲ふり昔源三位頼政の女子讃岐と云ゝ二條院へ宮仕をして沖の石乃秀歌を詠じて天上に名哥の誉を遺しぬ


天王山
堀尾勢
惟任方

宝寺
秀吉本陣
羽柴方
玉堂画

今汝関白の召を蒙る縡先考尊霊の汚名を雪ぐ最上の孝養と
を成ぬべきあり汝の奉仕ハ國次の手柄あり他に對して恥べきに非ず
と詞を盡して勧めるきば彼女子遂に承引ゐして待女と成て奉仕
けるの心操優〻美人ゐれぞ秀次公殊に御意に協ひ忽ち深閨の
召て側妾と〻給ふ秀次公の淫肆の行状猶此外に數累りくきバ彼石
田三成之を讒言の種とし御父大閤を憤らせ奉り丈禄四年秀次高
野に入遂に屠腹して果給ひくり側妾と成る婦人三十六個是も殘
ず斬罪と成て〻り然ど光秀の女子に於ても信長公の怨介子孫と
引くや秀次の寵遇得さると雖も嚮に助け〻ふ〻秀吉公の為却て
憎こを受誅せらる偏に是父光秀の餘殃ゐんと介頃世俗も風説せ

〻こそ是この一條ハ天正十年より文禄四年へ打係りたる十四年の
間の長話説を茲に迫めて述る所ゐ〻次の回より再び天正十年な
る事跡の譚に説戻れバ看官前後を混じて閲すなこ〻ば

○羽柴明智城刕山崎大戰爭　並びに明智方の諸勇士陣没

天正十年　壬午六月十一日羽柴筑前守秀吉に〻亡君右大臣信長公
の怨敵明智日向守光秀を誅伐果〻亡君御父子忠死の家臣ど修羅の
妄執晴させ奉り須弥の共恩報じ莫んと介身討手の總大將こと〻り
織田家の家門恩顧乃大小侯中川瀬平清秀高山右近安部仁右衛門
塩川伯耆守堀久太郎秀政池田紀伊守信輝父子丹羽五郎左衛門
長秀蜂谷出羽守頼隆神戸三七郎信孝等各々尼ど崎ゑて勢を合し

總大將羽柴秀吉の手勢にハ舍弟羽柴美濃守秀長甥同く秀次青木勘兵衛秀以浅野弥兵衛長政同く左京幸長蜂須賀彦右衛門正勝中村式部一氏生駒雅樂頭近正大谷由松吉隆杉原七郎左衛門家次黒田官兵衛孝高同く息吉兵衛長政木村阜人定經山内對馬守一豊田中兵部吉政増田兵太夫長盛長束大藏正家寺沢志摩守正成石田佐吉三成有馬玄蕃豊氏小西弥九郎行長以下総勢合して三万余人十一日雞明に尼が嵜を進發し城刕乙訓郡山崎を臨み一同出勢致されるか秀吉ハ寶寺に本陣を居諸将何れも懸り能場所を彼此省定め陣隊ふす時に秀吉腹心の郎等ある堀尾茂助吉晴を呼て曰く今般の軍ハ唯一舉の雌雄にて敵の先を取を必勝とす依て光秀此天王山を足溜りに兵を置んと計るハ必定之を味方へ取敷ときは敵を眼下に討捲るゆゑ矢玉を放つに便利も能介外進退自由かるべし汝逸く天王山へ馳登り敵を山上へ進歩せざる様支へ散すべしと指揮有るきバ吉晴畏つて遅兵八百人を率へ天王山へ進み向ふ是六月十一日昏過刻の縡ふり去程小明智日向守光秀にも豫て智謀鋭き秀吉を察ハ渠に計畧先距ゝて翌十二日の夜半刻に家臣松田五郎左衛門に指揮し介方急ぎ天王山に馳登り羽柴勢を山頂に登らせず鳥銃を撃聯ねて追落せよ敵に此所把る時にも味方平場の戰ひと成て大きに味方の難儀有るべし努めて働くべしと下知しけきバ松田承たり其手の武者大将並川

掃部助に相断り弓鳥銃三百挺を准備し兵卒七百余人を引属へ天王山へと攀り省きば羽柴方より一隊の軍兵們絶所の山岸に屯集して夫と省るより鳥銃の筒先揃へ進ませどぞ撃立にる松田が軍兵些も痿まず押て攻寄んと登りつ又を打違る程に成る時堀尾ゲ手より撃出に鳥銃忽ち軍将松田太郎左衛門胸板撞地撃抜きて馬上に得忍ず真逆さまに溪間のうげに陥りる松田ゲ從兵們色を失ひ進こも遣ず打噪ぐ所を堀尾勢弥鳥銃繁く撃立る堀久太郎秀政も競ひ登り堀尾ゲ勢に力を添へ闘を舉て攻登り揉に揉立突捲りるきバ松田ゲ兵ハ大将を撃殺さを心こちめき崩き亂して僉引足ともりて山を下り大将光秀の本陣へ注進す偖まさ光秀の方部索の諸将にて余一番乃中隊の人にを明智十郎左衛門光近柴田源左衛門奥田宮内同く市之助齋藤内藏助利三溝尾庄兵衛後藤喜三郎磯野彈正阿閉淡路守多賀新左衛門鳥山主殿助久徳六左衛門余勢五千余人左りの先鋒にを村上和泉守清國山本對馬入道山入齋津田與三郎進士作左衛門伊勢安房守上野筑後守杉原潰岐守伊藤志摩守庄田權之助松本主膳余勢二千七百余人右隊には藤田傳五郎行政同く藤三伊勢與三郎諏訪飛彈守御牧三左衛門舍弟同く勘兵衛託美隠岐守櫻井新五左衛門逸見木工允香川刑部余勢二千余人亦山の手へ向ひりる人々にを並川掃部助易家同く息八助妻木忠左衛門荻野彦兵衛波々伯部權頭加治

石見守酒井孫左衛門和田木工助尓勢三千余人総大将光秀の旗本にゝ中沢豊後守知綱三宅孫十郎比田帯刀村越三十郎関田太郎八堀口三之丞同く三太夫隠岐内膳を先として尓勢五千余人ゆり総軍合して一万八千二百余人植野調子久見に陣を列ね狐川を前に隔向ふ然るに六月十三日の早朝に京地の住民二三百人明智が仁計歓びの余り樽肴菓物餅の類を持来り御陣見舞と云て参りゝるが此時天王山に向ひゝりける松田が軍勢敗走ふして光秀が本陣へ馳帰るを京地の住民們之を看るより羽柴ゝ明智の差別も知ず二三百人の土民後をも省ず早々都へ逃帰りけるを羽柴方にゝ斯と看るより敵陣裏崩きの様思ひゝきゝば總軍勢大きに勇み進み此

虚を外する討て把と一番に進み向ふ軍将にゝ中川瀬平池田信輝丹羽五郎左衛門蜂須賀彦右衛門羽柴孫七郎黒田官兵衛中村式部増田兵太夫青木勘兵衛以下無二無三にぞ駈入ゝる山の手へハ堀久太郎を始ゝとして浅野左京生駒雅楽助大谷由松木村阜人の輩透間もなく斬入ゝるゝバ明智方にゝ松田討れゝより一将無して軍隊亂ゝゝ初度より敗走の氣を顕ハゝゝゆゝ寄手の勇兵に討捲らるゝ悉く散亂して引足とゝる並川掃部助易家踏留つゝ暫く支へ戦ひゝゝりゝが竟に青木勘兵衛が為討れゝゝり總て丹波武士及び山本山入斎諏訪飛弾守ふゞゝ素足利家の士ゝりしが義昭公中國落の後ハ明智が幕下に伏従して今般の催促ゝる馳

加する之等も此戰ひに陣没ふに尓外妻木忠左衛門波々伯部権頭
酒井孫左衛門同く與太夫以下究竟の者們五百余人枕を並べ〳〵戰
死ふ〳〵り此時節南風吹起りて寄手の馬煙り戰〳〵捲上明智方
の上に打覆ひて諸軍土砂の為眼中を痛ま〳〵愈浮足に成て散動
する然ども明智方ハ大事の場所ゆゑ新手の兵を先繰入替魚鱗ふ
進〳〵鶴翼に備へ憤激突戰死勇の働き尸ハ馬蹄に踏ふ〳〵らる共
名ハ千載に傳へふん〳〵面々死後の耻を厭へゞ逃まゞ去じと切結
びて或ひゝ組打指違へに双方死傷の者數を知ず既り亂軍乃色
顕をしつ明智方負軍と成にゝまバ明智十郎左衛門光近村山和
泉守奥田宮内伊勢與三郎ふど脆き敗軍最口惜しとて逃惑ふ

味方を勇め激し七八度把て轉して隊を立敵を喰止悪戰ふせど
も各々數ゝ所の重痍を負汗と血汐に五躰狼ぐりて食已と打倒れ
て息絶〳〵り御牧三左衛門尉兼顕ハ大将光秀の陣へ使を馳させ今
日の軍是まで之社存る俺們同胞陣没仕り候ふ君尓隙り何方へ
成とも御立退有て然るべく候ふ片時も急ぐせ給へと禀し送る御
牧ハ舍弟勘兵衛諸〳〵も手勢二百余を随屬して群り競ふ敵の中
へ面も振ず突て入少時支へ戰ひ〳〵りしが主従同胞一個も残らず戰
場の迷鬼と成果にゝり藤田傳五郎行政ゝ諸軍を指揮して防
戰しけるゞ深疵數ヶ所受とるにより是非に逮ずず引退く其外
陣没の輩にゝ藤田藤三同く傳兵衛奥田市之助溝尾五右エ門

進士作之丞磯野彈正鳥山主殿助伊勢安房守上野筑後守庄田
權之助松本主膳櫻井新五左衛門逸見木工允堀口三之丞隠岐
内膳以下宗徒の輩千二百五十余人雑兵共り凡三千余人皆々忠死
を遂るぞ哀れなき偖大将日向守光秀ハ猶此時までも本陣に在て
牀机の上に座しける今ハ早俺自ら一戰なして萬卒の報恩り尸
を曝し武門の本意を果さべしと馬を引寄乗んとしける比田帯刀
止めて禀しけるは此敗軍を着て渥とし給ひ輕々しく死を急ぎ給ふ
ハ甚ぞ御短慮の様存じ奉る一且勝龍寺の城に引入給ひ介上に如
何様とも御思し召に任せらるべしと勧めける斯る所へ進士作左エ門
貞連溝尾庄兵衛茂朝等太刀打折甲の前立切落され難戰の中を

遁れ帰り帯刀同前に諫言禀しけるきば光秀も最もと思慮巡し
て比田帯刀を前打して漸く七百余人を相具して十三日の暮過
刻陣を拂ひ勝龍寺の城に入りける斯て寄手の羽柴方にハ今日
の闘戰思ひの侭に打勝此上ハ勝過ぎる社軍法秘術ありと大将秀吉
より黄色の母衣武者を以て先手の諸兵を呼留め尚も要慎稠く警
固面々討取所の大将分の首級秀吉實撿にぞ遣バきける

○光秀小栗栖にて命を隕す並び明智方の勇士諸所にて切腹

然程に惟任光秀に於ハ勝龍寺防戰の軍立を奈何為すべきと評議
まちまちの城代三宅藤兵衛禀しけるハ名将斯る小城に御座ん縡武畧
の拙きに似て候ハ急ぎ江刄坂本へ御帰城有て御計策こそ然るべく

候ふ當城の儀ハ並川八助を始め中澤豊後守も唯今山手の陣より道
き来り丹波武者三百人計り相見へ候ふ上ハ此先勢兵と合併おし
て小臣當城に相懐へ候ふ事ハ秀吉總軍を以て攻圍むとも見苦し
之おき様仕るべしと勇こを含みて勸めくるバ光秀實もとや思ふれん
村越三十郎堀與治郎進士作左衛門を先打とし溝尾庄兵衛比田
帶刀を後陣として其勢五百余人十三日の亥の刻おひに竊て勝龍
寺を出城して川端を上りに北淀より芹川を距て深草の郷小躝り来
るに家来們ハ終日の戰ひして人馬共に草臥くるゆへ或ひそ疲れ伏
又ハ落失て雜兵共て附屬ふ者ハ漸く三十余人と成ふりける徒て
十四日の丑乃刻計りに宇治郡小栗栖の里を歴くる所に郷民們物

騒ふるに乘じて村々蝶じ合して蜂起を企落人と看バ武具剥とて
俺一に簑笠に打扮竹鑓引提鵜の目鷹の目に窺ひくまぐ明智の
主從夜深て通るハ偖こそ落人御座んおれと合図の鐘太鼓に夥計
を聚め薄闇乃藪林に屈み伏主ハ誰共白刄に竝ぶ竹の穂先も青見
を兼る藪垣越に無躰に突とり日向守光秀ハ恁ても氣着ず馬上六
騎目ふ通し所に天刑茲て遁れざるめるや脇の下を深く刺まとり
是ハ何者ふ小ぞ狼籍と聲振立つ咎むれバ郷民ハ竹槍棄置処去さ
り光秀痍を忍びて馬を逸め道三丁計り行まけるゞ彼鑓痍殊に痛
手ふれバ最早自滅の時節ふりとて豫て覚悟を致さまくん光秀道
の傍乃木蔭て寄て馬より飛下件の竹鑓を田の畔にぞ立置くるは是ハ

敵の鑓を棄て逃さうと後人に誘られどもの用心とも光秀溝尾庄兵衛に稟しけるハ俺今斯重痍を負ぬまバ所詮坂本までハ行着難うり尚も匹夫下郎に襲ちれんより速に自害せんと思ふ事ハ俺辞世ふきバ紀念とも看よと鎧の扯合より一紙を拿出し遞与庄兵衛謹んで是を看るに

逆順無二門　大道徹心源　五十五年夢　覺来帰一元

明窓玄智禪定門　とぞ書こうける庄兵衛之を讀ゝる間に光秀脇指を拔て逆手に拿腹一文字に掻切ゝまバ庄兵衛驚きあゝ苦痛させじと背へ廻りて介錯おしけり此時進士作左衛門ハ半丁計り往過たりしゝ主人看へざれバ把く返すに光秀屠腹の体を看て仰天し南無三貞連御先を仕るべきに爭後き奉らんやと云て光秀自害の脇指を拿て心元に刺立てこそ伏ゝる比田帯刀則家も蒐来り君をうしなハ豈世に存命んや黄泉の道に伴侶給へと云て自ふ首に太刀押當て我と首刎落して死失ゝり溝尾庄兵衛ハ両士の追腹感激し介躬も俱ゝと思ひ入るゝ敵に首共を捕ん縡忠士の望む所ふ非ずと比田進士両個の者ゝ面皮を手早く削り剥して誰死骸とも看分ぬ様に仕主君光秀の首級をとゞ京都妙心寺に葬らんやと衣に包こて山距に道を急ぎ狼溪と云地へ来りゝるに茲ハ小幡大津の往還ふれバ羽柴方より軍兵を廻して大路小路の通行を塞ぎ吟味厳重に構へゝまバ竊て京都へ出る縡能ゝ山科峠の杜下乃際に是非ふく主君

明智光秀
山崎を
敗走して
小栗栖ふ
滅亡する
図

光秀

玉堂画

の首級を埋葬し今ハ愁世に思ひ置綷ゝ此上ハ快く自害を遂バ
て死出の御供追着ぞやと山路深くも地を撰ミける茲に溝尾庄兵
衛が従卒に名を與七郎とゝふん呼る者あり今沒落の際に到る迄も
主人に離ず附従ひくるが庄兵衛漸く塲所を看立て鎧を脱棄座
をしめつゝ與七郎へ遺言して稟しりぬハ俺本國なる妻子を殘せり主
君の為にそ眷族有とも看轉るべきの心ハ無ねど武士の表と恩愛
の間ハ亦棄難きハ人情の常なり今俺身に筐とてハ有ねども肉身
乃物を贈り遣さバ後永く回向の種ともゝ無事に帰りて遁與
具ゝバ草葉の蔭より汝が忠節七世を累ねて忘るべゝとぞ云り
兩の鬢乃黒髮を切拿帖紙に包ミて遁与つ亦胴巻の黄金を打

外して汝の旅費にせよとて與へくり與七郎ハ男泣に声立るを庄兵
衛ハ人や聴んと是を制しゝ竟に腹掻切て死たりける時に敵兵
們ハ明智を看出さんと野山の隅まぞ穿鑿ゝして松明照して數
多来ぞ與七郎ハ死骸を隠す間ゝ余躬を看附られじく思ひけ
きば或岩陰の叢乃中へ這込息をころして屈み躲るに敵兵們ハ松
明の火にて溝尾庄兵衛が亡骸看附出し此奴ハ正しく光秀が郎等
溝尾庄兵衛と云る者ゝり此者茲に相果るを看れぞ逆將光秀の
此近邊にて討きとるゝ自滅ゝせしゝ定めて余首級ハ土中深ク埋め
さるにぞ有んずゝん手柄次第に探し出せと面々松明の火に日孫
廻きバ與七郎ハ忍ぶ〻惚へ兼卒と叢の中を這出て松明の影せぬ方

へ足を逸め虎口を遁る心地おして難あく故郷丹波國へ玉緒拾ふて歸りくるとぞ恁て羽柴方の軍兵們ハ一固の打反しくる土間をみとめ出し刀の先以て穿ち轉せど果して錦の衣に打包くるる生首一固穿出したり眉間を傷らる痍もあまバ疑ひもふき光秀ゞ首級と僉々歡ひ勇んゞ早騎を仕立首級を秀吉本陣へ送りに々實や有為天寥の世の形勢ハ絶一日一夜に盛衰流轉し身首分裂せら水て敵手に度り尚集木に懸りて罪悪を挙らる唯是自ら一念の惑ひく雖も亦哀き果敢身の終あり々り偖無慙ありしハ光秀の息男十治郎光慶ハ今年己に十四才の少年ホれど器量才覚父ゑ恥ざる生質にく丹孫亀山城に指置ゆく處不圖卯月上旬頃よりして

假初ゑ煩ひ出しけるゆ後くそ重き病症と成に京都より名医を呼寄百般療治を竭しけき共未ゞ快氣に到らぬ所六月二日父光秀の叛逆暴威帝都に揮ひしと聽しより重病の中に心顛倒せしゆ愈病脳烈しくふりて同く十三日の暮程に竟小空しく死去ふしゆ々光慶ゞ後見として附置々る隠岐五郎兵衛惟恒と云ハ光慶の病死を深く悲ミ其老臣の列に加わりし縡君恩勝く計ふべくば候ふ然るに今若殿に離き奉り斤時も存命べきに非ずく忽ち介座り於く屠腹ふに當日城州山崎合戦ありて明智方悉く敗軍し残兵諸方へ離散の中に亀山城へ注進ふす者有しハ妻木七右衛門内藤三郎右衛門等急ぎ光慶ゞ亡骸を取隠し是を伜求浄土の菩提心

〻して両個共に髻りを切棄頭陀の行ひもぞ出にける無常迅速會
者定離先亡要路の善知識と悟まゝバ無明の苦域に沈こて已と心
の鬼に敵を拵へ修羅闘諍の炎に陷る繹口稱念佛より心解すこ
佛縁の者ハ厭ふも理りぞこし然バ昔傀儡師の狂哥こも

傀儡師首に懸さる人形笘ほゝけ出ふて鬼を出ふ

藤田傳五郎行政明智治右衛門光忠ハ山崎の戰場を切脫されども
數箇所の手痍を身に受しゆへ藤田ハ淀の邉に退きつゝ手痍に屈し
て屠腹ふに又治右衛門光忠に於てハ去る二日本能寺攻の戰ひに痛
手を二ヶ所受にゝまゝバ知恩院ヶ寄宿し療治加へしゆ亦々山崎大
戰出来して味方悉く打負殊に光秀小栗栖邉にて自害せしよし

聽へゝまゝバ光忠時に合ざるを悲しむ所へ家来二三個馳来り手負乃
禽ハ巣に良るゝ候ふ一旦丹刄八上の城へ引取り安く療養然るべ
んと勸む光忠一向に承引ふさず生死共君父に屬ハ武士の心得最早
命を貪る時に非ず一首の古哥を詠ゝ自害ふかせり光忠行年四十三
才ふりとぞ

誰為の名ふかぞ身より惜むゝん墓ふき者ハ武士の道

又城刄勝龍寺の城に於てゝ同く十四日の曉天敵方攻寄城代三宅藤
兵衛綱朝防戰秘術を盡し働さるゝ大軍四方を把圍こて矢玉を飛し
息も継ず迫詰ゝまゝバ綱朝主従今ハ是まぞゝりと竟に城ふ火を懸
自害ふして城ハ残らず灰土と成ゝり此外山哥にて陣没の者ハ藤田

傳兵衛秀行（傳五郎子息）舍弟藤三秀久伊勢與三郎貞仲諏訪飛彈守盛直の輩將卒合して四百七十人亂軍の中に滅亡に逮ぶ自是江州坂本の城攻又安土城の燒亡の話說此續條に云べくおゝも冊中丁數定限有て且ハ本傳石山の事實果さず依て明智の話ハ茲に斷〻次〻石山の繹に說〻へるゝ省給へ

繪本石山軍記第三編巻之七